Title	図書館を彷徨う
Author(s)	土方，透
Citation	ぱぴるす 55 号(2012 年秋冬)，2012，1p
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4313
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ぱぴるす

聖学院大学総合図書館報

第55号（2012年秋冬）

発行・編集　聖学院大学総合図書館
〒362-8585　埼玉県上尾市戸崎１番１号
電話 048-725-5461　FAX 048-780-1096
E-mail : lib@seigakuin-univ.ac.jp
URL : http : //seiglib.seigakuin-univ.ac.jp/

図書館を彷徨う

土方　透

いささか古びた表現だが、現代の社会にはモノが溢れている。少なくとも「金」があれば、商品や快楽はおろか、時間や空間さえも、また場合によっては生命さえも手に入れることができる。しかし、「溢れている」という状態は、こうした「なんでも手に入る」状態よりさらに一歩進んだものでいる。

たとえば経済学では「希少性」という概念を用いる。なにかが足りない。だから、それを満たそうとする欲求が生ずるというのである。それが経済を動かす、ひとつの基本的な因子となるという説明である。そこでわれわれの社会を見回してみる。何が「稀少」であるか？　なにが「足りない」か？　漠然と考えれば、たしかに「なにか」は足りなく、なにかは欲しい。あればきっと便利だろう。だからといって、なにがなんでも欲しいというわけではない。これは、希少性そのものが稀少であることを示している。

しかし、これでは欲求は喚起できない。商品は売れない。経済は活性化しない。そこでどうするか。「売れるように」するのである。もはや不要とも思える付加価値をつけて、それをなかば強制的に売る。たとえばコンピュータのOSやメモリである。おそらく世界中でかなりの人がもうこれでよいと思っているのに、仕方なく、「魅力的」な新製品に走らされることとなる。これが「溢れている」という状況ではないだろうか。

一方、精神の世界は、つねに満たされ続け、さらに刺激され、人びとは渇望し、さらに満たされることを望む。無駄に溢れることなどけっしてない。フランスの哲学者サルトルは、その自伝的書物『言葉』のなかで、父を亡くし、裕福な親戚のもとで育てられた経験をして、「なにもかもが与えられ、なにもかもが与えられていない」と述懐している。なにも不自由はないが、しかし、それは遠慮のなかでの出来事だからだ。そこでサルトルは「読む」行為にふける。そのときはだれに気兼ねすることもなく、まさに自分の精神が書物の世界で自由に振る舞えるからだ。書物の世界に没頭し、彷徨う精神の主は自分であるからだ。さらに彼はもう一歩進む。みずから「書く」のである。みずからが主人公となる。こうして、哲学者・思想家ジャン・ポール・サルトルが生まれる。

モノに囲まれ、場合によってはモノに襲われている現代の社会にあって、図書館の森を散策し、「読み」「思索し」そしてみずから自分の人生を「書いていく」そうした時間をもってみてはどうだろうか。

（政治経済学部教授、総合図書館長）

著書紹介

土方 透著『法という現象』

ミネルヴァ書房　2007

この本を書くきっかけは、自分が大学に入り、はじめて「法」に接したときのショックにある。小さな本であるが、それを一つの作品として仕上げるのに実に二十五年かかった。拙いながら、大学での刺激を持ち続けた一研究者の在り方として知っていただきたく、ここに紹介することにした。

ただし、内容は難解きわまる。